



日本植物病理学会ニュース 第94号

(2021年5月)

【学会活動状況】

1. 大会開催報告

令和3年度日本植物病理学会大会は、三重大学、三重県、農研機構野菜花き研究部門の会員で組織した実行委員会により、3月17日（水）～19日（金）の3日間、オンライン仮想会場において開催されました。当初、新型コロナウイルス感染症の終息を見込み、対面方式を想定した準備を開始しましたが、2020年秋には感染者の急増を受け対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド方式での準備を並行して開始しました。しかしながら年始になっても開催時の終息が見通せず、オンライン方式のみでの開催を決断しました。このような事情から、従来のプログラムとは異なって一般講演から始まり、総会や会議が18日、研究会はさらに別日程と混乱を招く結果となってしまいました。

学術講演は、オンラインの特性を活かして新会長講演（土佐幸雄新会長）、3名の学会賞受賞講演（中保一浩氏、大島研郎氏、白川隆氏）、3名の学術奨励賞受賞講演（橋本将典氏、兵頭究氏、埋橋志穂美氏）に加え、昨年度の大会で講演を拝聴叶わなかった令和2年度会長の有江力氏による会長メッセージ、3名の令和2年度学会賞受賞講演（平塚和之氏、眞岡哲夫氏、津田新哉氏）、3名の令和2年度学術奨励賞受賞講演（荒添貴之氏、浅井秀太氏、峯彰氏）が動画としてオンライン会場で公開されました。植物病理学の包括的レビューから新知見、若手研究者による未来を期待させる最先端の研究まで、図らずも充実した学術プログラムとなりました。従来の大会であれば、会場の制約から全ての講演を聞くことは諦めざるを得ないのですが、期間中好きな時間に堪能できたのではないのでしょうか。また、仮想会場となったことで、プログラムは見やすく、病原の種類や手法を軸に縦横に移動しながら聴講し、議論にも参加できる利点がありました。通常大会での一般口頭発表では、発表させて頂くという雰囲気のある学生会員の発表や、語学の垣根のある留学生の講演も、各講演の掲示板では学生会員同士や英語での活発な議論が見られました。これを

反映し受賞講演を含めた講演総数250題に対し、視聴回数は19150回、討議のための投稿数は1598回となりました。実にお一人あたり25題程度を視聴され、1回以上議論に参加されていることになります。

運営も新たな試みがありました。参加費の支払は原則クレジットカード払いとして会計処理を単純にしました。講演要旨予稿集も追加の販売をせず、web上で検索可能なPDFファイルを原則公開としました。実行委員会も、運営の多くを業者に委託して、少人数とし、意志決定のスピードをあげ、なんとか乗り越えられたように思います。

いっぽうで、このように新たな利点もやはり対面方式には劣るのではないのでしょうか。情報交換、議論、問題の解決、そして偶然の出会いにより生まれるアイデアの閃きがあったのでしょうか。また、今後の大会では、オンラインの利点を取り入れた新しい対面方式を生み出せるかも知れません。この大会をお手伝いした者として、これらの点が気になるところです。次の機会に会員の皆様よりご意見賜りたく存じます。

総計で740余名の参加を頂き、なによりも無事に会期を終了できたことを安堵しております。会長を始めとする学会役員と学会事務局の皆様、座長や優秀発表賞の審査をお引き受け頂いた皆様、協賛・ご協力頂いた諸団体、開催準備・運営に当たった実行委員諸氏、ともに手探りでオンライン学会の準備を進めた運営受託企業の皆様に厚く御礼申し上げます。（大会委員長 中島千晴）

2. 研究会・談話会等開催報告

(1) 第30回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム報告

第30回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムは2020年に鹿児島県で予定していたものの、新型コロナウイルスの状況を勘案し開催中止を余儀なくされた。今年は学会大会委員長の三重大学中島先生やホスト局としての機能を引き受けて頂いた日本植物防疫協会のご協力を賜り、2021年3月23日にオンラインにて無事開催することができた。初

の開催形式ということもあり準備は手探りであったものの、公的機関、大学、農薬メーカーおよび農業団体などから200名以上と例年より多くの方々に参加いただき、またチャット機能を用いて質疑も活発に行われ盛会となった。

はじめに、千葉県農林総合研究センターの青木由氏より「千葉県におけるDMI剤耐性ナシ黒星病菌の発生リスク軽減に向けた取り組み」と題して、県内で最重要となっている黒星病防除を軸とした散布体系の構築につき講演を頂いた。防除の主軸となるDMI剤における耐性ナシ黒星病菌の発生リスクを低減するための取組として、薬剤の系統や耐性菌リスクの把握と鉢植え樹を用いた簡易的なモニタリング手法を紹介頂いた。次に、長野県果樹試験場の近藤賢一氏より「長野県における薬剤耐性リンゴ黒星病菌の発生と対策」と題して、近年問題となっているリンゴ黒星病菌の発生状況と膨大な調査に基づいた対策方法につき紹介頂いた。非常に多くの圃場での巡回調査と耐性菌モニタリングでの多数の検定データから有効な薬剤と防除体系を紹介頂き、産地の危機に対して本病害を何としても撲滅しようとする各関係機関の努力が垣間見えた発表となった。午前中の最後は三重県農業研究所の川上拓氏より「三重県における灰色かび病菌の薬剤感受性検定体制の構築」と題して、灰色かび病菌を題材として各系統の薬剤の感受性モニタリングの検定体制を紹介頂いた。感受性モニタリングは重要ではあるものの労力面やコスト面から検定する病害や薬剤を絞る必要がある。実施においても関係機関の方々との連携が不可欠であり、検定体制を整えることの重要性を紹介頂いた。

午後の1題目は茨城県農業総合センター園芸研究所の宮本拓也氏より「ピーマンうどんこ病菌の茨城県における薬剤耐性菌の発生状況と防除体系の検討」と題して、害虫防除に天敵を導入した中で最適うどんこ病防除体系につき、薬剤の感受性を丁寧に調査することにより紹介頂いた。天敵に影響が無く、かつ有効な防除薬剤が少ない中、有益な方法を示して頂いた。他地域や他作物でも参考になるものと思われる。次は住友化学株式会社の松崎雄一氏より「新規QoI殺菌剤メチルテトラプロールの発見」と題して、既存のQoI剤耐性菌に対しても有効な新規薬剤の紹介を頂いた。耐性の原因となる変異型が限定されるQoI剤に着目し、交叉耐性を回避するような化合物をデザインするという着眼点と薬剤の創出力に深い感銘を受けた。最後は、石井英夫氏による「米国における耐性菌研究の現状」と題して数多くの有益な情報を提供頂いた。日本ではまだ注目されていない貴重な情報を多数紹介頂き、海外の情報にもアンテナを張ることの重要性を感じた。また、石井氏から



写真1. 前半3題についての討議の様子



写真2. 殺菌剤耐性菌研究会幹事会の活動報告



写真3. 後半3題についての討議の様子

研究者たるもの論文を書け、海外に出ろ、との熱いメッセージが発せられた。本シンポジウムを聴講頂いた方々には刺激を受け、モチベーションアップになることを期待したい。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、講演者の方々および多数の質問をお寄せ頂いた参加者の皆様に改めて厚くお礼申し上げる。また、アンケートも多数お寄せ頂き感謝申し上げる。より良いシンポジウムとすべく今後の参考にさせて頂きたい。次回も多数の皆様の積極的なご参加をお願いしたい。

(黒木信孝)



写真 4. 事務局の様子

(2) 第4回植物病理を紡ぐ会開催報告

第4回植物病理を紡ぐ会は、植物病理学会大会会期中の令和3年3月19日にオンラインにて開催された。前身である『全国「若手の会」を目指して』勉強会より数えて6回目となった今回は、大学、公的研究機関、企業から245名（学生69名）の事前参加登録を得て（約180人の同時接続を確認）、活発な質疑応答が行われ、非常に熱のこもった勉強会となった。

これまで植物病理学会のいくつかの部会では、学生・若手会員の研究交流・情報交換・交流を深める場として「若手の会」があり、活況を呈してきた。「植物病理を紡ぐ会」は、そのような場を全国大会の場でも作り、特に学生・若手会員に対して、①「現場から実験室まで」、「基礎から応用まで」という植物病理が扱う対象の広さ、面白さに触れてもらい、②そのような植物病理学を学んだ人間の人生・将来の選択肢の広さを知ってもらうこと、さらには③業種や分野の垣根を超えた植物病理に関わる人間の異分野交流、の3点を目的として、文字通り、植物病理の「分野」と「人」を紡ぐための場として企画された、植物病理学会若手・中堅有志による自主勉強会である。本会では、植物病理の幅広い分野からの講師を招き、現在の研究や職務だけでなく、学生時代から今の研究・職務へと至る「半生史」をご紹介いただくこととしている。現在、各方面で活躍されている方々がそれぞれ人生の岐路でどんなことを考えて、どんな選択をしてこられて今に至るのか？という、いわゆる研究・職務の裏側に触れる機会というものは、若手・中堅研究者にとっては示唆に富んだ貴重な経験になるのではないかと考えている。

そのような趣旨のもと、今回は、湊菜未氏（新潟大学）



写真 5. 参加者一同（一部抜粋）

による「CGIARでの研究生生活：東南アジア編」、加野彰人氏（タキイ種苗株式会社）による「育種から見る病理を紡ぐ大切さ」、さらに、田中茂幸氏（摂南大学、マックスプランク陸生微生物学研究所）による「トウモロコシ黒穂病菌と宿主の細胞間コミュニケーションの解明に向けて」という3題の講演をお願いした。まず、湊氏からは、以前所属されていた国際農業研究協議グループ（CGIAR）傘下国際熱帯農業センター（CIAT）での研究生生活について紹介いただいた。CGIARの研究課題・資金に対する考え方などに加えて、滞在国の文化的背景が農業技術の普及活動に大きく影響を及ぼす点など、現場でのリアルな農家とのやり取りを紹介いただき、参加者一同農業現場への普及活動の重要性について考える機会となった。続いて加野氏からは、企業としての病害抵抗性育種に対する取り組みについて紹介いただいた。特に、国際企業連携や病害抵抗性育種についてのこれまでの取り組みと今後の展望など、企業での研究について知る大変貴重な機会となった。そして田中氏からは、トウモロコシ黒穂病菌の宿主感染機構について、これまでの研究成果と現在の展望について紹介いただいた。研究の話はもちろんであるが、ドイツへ留学するに至った経緯や現地での生活についてもわかりやすく紹介いただき、特に学生・若手会員にとって、留学の意義・魅力について学ぶ機会となった。

さらに、一時代を築かれた経験豊かな講師から若手中堅へのメッセージも含めて「半生史」を語っていただきたい、という声から前々回より始めた特別講演（前々回は奥野哲郎氏〔龍谷大学〕、前回は久能均氏〔三重大学 名誉教授〕）として、青木孝之氏（農研機構）に「Fusarium（フザリウム）属菌における種の捉え方について」と題し、ご講演いただいた。Fusarium 属菌の分類の歴史について、異なる派閥の種概念を含め、詳細にわかりやすく紹介いただいた。現在進行形である Fusarium 属菌の分類の細分化について、多くの質問が寄せられ、盛り上がりを見せた。参加者一同「種をどのように把握して定義付けるか」という分類における基本テーマについて、考える大変貴重な機会となった。

以上のように、限られた時間ではあったが、多彩な講演者の研究に対する熱意および「半生史」を参加者一同共有させていただいた。本勉強会の目的の一つの異分野交流に関しては、セミナー終了後、ウェブ懇親会を行い、活発な意見交換が行われた。末筆ではあるが、大会中にも関わらずお集まりいただいた参加者の方々、また、多忙な時期にも関わらず（しかもボランティアで）お引き受けいただいた講演者の方々に、世話人一同心よりお礼を申し上げる次第である。（浅井秀太）

【会員の関連学会等における受賞のお知らせ】

石橋和大氏（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構生物機能利用研究部門上級研究員）と島田貴士氏（国立大学法人千葉大学大学院園芸学研究科助教）が、令和2年度（第16回）「若手農林水産研究者表彰」農林水産技術会議会長賞を受賞されました。本賞は、農林水産業及び関連産業に関する研究開発の一層の発展及び研究開発に従事する若手研究者の研究意欲の一層の向上を図るため、優れた功績をあげた若手研究者を表彰する賞です。受賞の対象となった研究業績は、石橋氏「植物のウイルス抵抗性遺伝子に関する研究」、島田氏「オイルボディの基礎研究に基づく次世代農業のための新技術開発」です。

（山次康幸）

【今後の学会活動の予定】

1. 部会

(1) 北海道部会

日時：令和3年10月14～15日

場所：北海道大学農学部（札幌市）

(2) 東北部会

日時：令和3年10月頃

場所：宮城県仙台市内を予定

(3) 関東部会

日時：令和3年9月21～22日

場所：東葛テクノプラザ（柏市）

(4) 関西部会

日時：令和3年9月21～22日

場所：金沢商工会議所（金沢市）

(5) 九州部会

日時：令和3年11月

場所：熊本県内を予定

2. 談話会・研究会等

(1) 第55回植物感染生理談話会

日程：令和3年9月1～3日

場所：ANA ホリデイ・イン リゾート 宮崎（宮崎市）

(2) 第17回植物病害診断教育プログラム

日程：令和3年8月23～27日

場所：秋田県立大学生物資源科学部（秋田市）

(3) EBC 研究会ワークショップ 2021（第16回）

開催時期・場所ともに未定

(4) 第14回植物病害診断研究会

日程：令和3年10月頃

場所：開催地区未定

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい。下記宛先まで、よろしくお願い申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ：

藤田佳克、宮田伸一、山次康幸、宮本拓也、川部眞登

編集後記

学会ニュース第94号をお届けします。令和2年度の大회는3月17日からの3日間、オンライン方式のみの開催ではありましたが、740名余りの参加者があり、盛会裡に行われました。

学術講演は新会長講演と3名の学会賞講演、3名の学術

賞講演に加え，昨年度の大会で講演が行われなかった令和2年度の会長からのメッセージ及び，学会賞と学術奨励賞それぞれ3名の方々の動画がオンライン会場で公開されました。

また，耐性菌研究会シンポジウムおよび植物病理を紡ぐ会が，それぞれ3月23日および3月19日にオンラインで開催されました。

オンラインでの大会は，情報交換や議論などで対面方式に劣りますが，より多くの講演を聴講できることや，繰り返し視聴などの利点もあったようです。手探りでのオンライン学会の開催にご尽力頂いた関係者の方々に深くお礼申し上げます。

(藤田佳克)